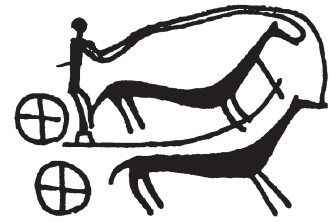


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 70



英語「100万語多読」指導

(3 ページ)

教養教育の可能性

(5 ページ)

北海道大学公開講座の日程決まる

(16 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

学部・大学院教育の国際化推進を

北海道大学 総長 佐伯 浩

現在、世界の主要大学が厳しい競争的環境下にあることは御存知のとおりであります。種々の機関が大学の世界ランキングを発表していますが、そのランク付けの指標はそれぞれ異なっています。主要な指標は、研究業績（ノーベル賞やフィールズ賞の受賞者数などを含む）や国際化されているかどうか、あるいは卒業生の活躍の状況等が主であります。大学教育そのものの評価というより、基本的にはアウトカムズでの評価となっています。国内的には、少子・高齢化が進み、大学全入といった状況の中で、各大学は優秀な学生を受け入れるための競争が行われていますし、一方で、定員割れを危惧する大学も年々増えてきています。優秀な学生を集めるため、特に

留学生を集めるためには、大学ランキングを完全に無視することは困難になりつつあります。資源に恵まれない我が国が、豊かさを実感し、かつ世界に貢献できるような国になるためには、まさに人材養成にかかっていると言えます。

単位の実質化と厳密な成績評価

本学では、昨年度入学の学部学生から厳密な成績評価と単位の実質化に向けての取り組みを実施して

まいりました。成績評価については秀評価に加え、GPA 制度を導入しましたし、5段階評価の配分割合の目安も設定いたしました。また、単位の実質化については、1単位の学習時間を45時間とし、2単位の科目では、15回の講義で22.5時間、学生自身の予習・復習の時間が67.5時間を要することになります。担当の先生方には、密度の高い講義になるよう工夫していただくとともに、毎回小テストを実施するなど、学生が興味を示すような魅力ある内容になるよう心がけていただく必要があります。

また、単位の実質化により、各学期に取得する単位の上限が決まります。先生方におかれましては、履修した科目は確実に身につけるようにするとともに、自学自習の習慣を早く身につけるよう教育することが肝要かと思えます。理解力があり、成績優秀な学生は、次の学期には、上限単位数に加えて4単位多く取得することも可能な仕組みとなっています。単位の実質化と厳密な成績評価については、教育に関係ある学内委員会で常に見直し、改善に取り組んでおられることに敬意を表したいと思えます。

また、本学では、他大学に先がけて、教員に対してFDを実施してきました。しかしながら、学生の授業アンケートの結果を見る限り、不十分と言わざるを得ません。今後はFDの範囲を広げることと、卓越した教授法で、学生からの評価の高い先生方の講義を参観し、実戦的な教授法のスキルアップをはかることも考えて良い時期に来ているようです。また、同時に、厳密な成績評価と単位の実質化については、学部教育のみならず、大学院教育にも拡充していく必要があります。大学の国際化推進のためには是非とも必要なことであります。

英語能力の強化

本年4月に外国語教育センターが設置されました。国際化の流れの中で、外国語教育は極めて重要です。特に英語については、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の向上が必須となってきました。昨年度、キャリアセンターが企業約300社に対して学生に必要な外国語能力のアンケートと、理系・文系各2学部の卒業生に対して、本学の教育に関するアンケートを実施しました。企業からは英語能力向上に対する要望が強く、また、卒業生からは、年代、学部に関係なく「学生時代、英語をもっと勉強しておけば良かった」と回答していました。

CALLシステムが導入された現在、外国語においても自学自習によるスキルアップの習慣を身につける教育が必要かと思えます。本学では、工学研究科と農学院に英語コースが設けられていますが、優秀な留学生を受け入れるためにも、また、本学大学院生の英語力強化のためにも、英語による講義を増やす努力が必要な時期に来ていると思いますし、英語のみで大学院を修了できるような体制づくりも考えて良い時期に来ているのではないのでしょうか。

改革への期待

教育改革の効果はすぐに表れるものではありません。しかし、本学が将来、世界の拠点教育研究機関となるためには、また立派な人材を送り出すためには、将来に向けて常に努力することが必要です。本学の教育改革を担う教育改革室、高等教育機能開発総合センター研究部、教育に関する各種全学委員会それに各部局が緊密な連携のもと、不断の努力と熱意があれば必ずや実を結ぶ日が来ると思います。

(本年4月まで高等教育機能開発総合センター長)

英語「100万語多読」指導

メディア・コミュニケーション研究院 准教授 高見 敏子

同 上

講 師 原田 真見

総長室重点配分経費のプロジェクト研究事業により、平成17年度から英語の多読用図書の購入を始め、平成18年度から英語演習で多読授業を開講しています。本稿では、従来の授業形態とは異なる多読授業の特徴とその効果を紹介します。

英語学習量の不足と多読の必要性

学生の英語力が不十分な理由の一つには間違いなく経験した英語の量の絶対的な不足があります。ある調査によれば中学3年間の英語の教科書の総語数が5,000語程度、高校3年間のリーダーの教科書が25,000語程度だそうで、これらを合わせても例えば児童書ハリー・ポッター第一巻(約77,000語)の半分にも満たないということになります。もっと多くの英語のインプットが必要であることは明かです。このような学生の英語の読書量不足を補うため、多読指導のプロジェクトを平成17年度に開始しました。

多読授業の概要

多読授業は教員が用意する英語多読図書を学生が読み進めていくのが基本的な形態です。学生は用意したたくさんの教材の中から自由に1冊選んで読み、終わったらその本の簡単な感想と総語数を記録して、また次の本を選びます。ほとんどの学生は時間中、熱心に読み続けます。自分で選んだ本ということで、決められた教科書に比べて、大変積極的な気持ちで取り組むことができるようです。

多読授業で行っているのは「100万語多読」(別名SSS[=Start with Simple Stories]多読)という多読法の実践です。従来の学校英語教育がとってきたのは「易しくて短い英語」→「難しくて短い英語」→「難しくて長い英語」という段階を踏む指導でしたが、「易しくて短い英語」から「難しくて長い英語」への移行があまりうまく行っていませんでした。これに対して「100万語多読」では「易しくて短い英語」→「易しくて長い英語」→「難しくて長い英語」という

方針をとります。この方法だと「易しくて長い英語」から「難しくて長い英語」への移行が比較的容易になると期待されます。

この学習法では、英語力によらず誰もが易しい本から読み始めます。日頃辞書と格闘して苦戦している英語の苦手な学生も、すらすら読める本があることを知って「これならわかる」「英語なのに楽しい」という前向きな気持ちになれるようです。そこから各自の判断で少しずつ上のレベルの図書に進んで行きます。こうして学生一人一人が自分の英語力に見合った本を選ぶことで「わからないからつまらない」という状況がなくなります。そのうちに「もっと長い、難しいものが読みたい」と言い、自然に上のレベルの本にチャレンジするようになります。多読図書にはそれぞれ英語の難易度と長さを規準にした読みやすさの指標を表示して、学生が本を選ぶ際の目安になるようにしています。

この「100万語多読」では、学習者が自分の学習量を読了語数という形で把握し、100万語という明確な目標に向かって、前進していることを実感できるということが、これまでの学習形態にはない大きな特徴です。多読指導では学生が読了語数を把握できるよう、多読図書にその本の総語数を表示する必要があります。この「総語数」と前述の「読みやすさの指標」が「100万語多読」の重要な要素になっています。

平成17年度から附属図書館北分館に教材として英語多読図書を開架してもらえるようになり、現在約1,350冊が利用できるようになっています。多読授業ではこの北分館の教材図書を毎週読んでくことを課題にしています。

多読指導上の工夫

活動が単調になりやすい多読授業で学生の学習意欲を維持するため、いくつかの工夫をしています。

まず、教室に用意する多読教材は毎回シリーズや

テーマに変化をつけるようにしています。学生の英語力や関心に応じて、多読教材はできるだけ多く揃えられることが理想的です。

他の学生の多読の進捗状況を知らせるのも効果的です。CALL 教室では BBS で毎週の進捗状況を報告させあったところ、たくさん読んでいる学生の例を見てやる気が出た、という学生が何人もいました。

加えて、読書記録を提出させて個別にコメントし、学生の取り組みを励ましています。また、学生によっては多読の進捗状況を表すグラフ用紙への記入が励みになったようです。

クラスによっては読書中に見つけた英語表現のミニレポートを提出させるという活動も行い、意欲的なレポートが多くみられました。

この他に、北分館の図書の紹介や多読学習者の成功談など、多読意欲の維持に役立ちそうな話をしています。

多読授業の意義と効果

多読は学生が自分で実践することもできる学習法ですが、受講生からは授業として実施することが有意義であるという声が圧倒的です。受講希望の理由にも、ずっと多読をやってみたいと思いながら一人ではなかなか始められなかった、授業に出ていれば定期的に読む時間が確保できるからという回答が多く、授業は多読実践のきっかけやペースメーカーとして重要な役割を果たしています。

平成 18 年度は多読授業を 1 学期に初級 2 クラス、2 学期に中級 1 クラスを開講し、いずれのクラスも受講状況は良好でした。初級クラスの目標は学期中に 10 万語、中級クラスは 20 万語としましたが、多くの学生が目標を達成しただけでなく、中には 50 万語以上の報告も複数あるなど、学生たちの取り組みは予想以上でした。10 月には 1 学期の熱心な受講生から 100 万語達成の報告もありました。このように授業後の状況までわかるのは珍しいケースですが、長期休暇中も数十冊以上の多読図書が借りられていることから考えると、一部の学生は自分で多読を継続することができているようです。

多読学習の効果を計量的に測るには授業期間が短いということもあり、特に測定を行うようなことはしていませんが、参考事例として 1 年間受講した 4

年生から「多読以外英語の勉強を何もしていないのに TOEIC の成績があがった。多読の成果だと思う」という報告がありました。多読は即効性はありませんが、じわじわと実力が身につっていく学習法です。

多読指導で顕著に表れるのは心理的な効果です。ほとんどの学生は開始後まもなく「嫌いだった英語を読むのが楽しくなった」「長い英文を読むのが楽になった」と報告してきます。初見の文章を数千語読む期末試験の後で「多読の前に比べて明らかに読めるようになったことを実感した」という学生もいました。また「英語の本を読むのが習慣になった」という学生も出ています。ほとんどの学生は「これからも時間を見つけて多読を続けていきたい」と言い、授業の目標で満足せず、将来 100 万語を達成しようという気持ちを持ってくれるようです。

多読指導の今後

多読学習で懸念されるのは、学習者が必ずしも正しく読めていないのではないかという点です。多読学習では、数多く読むことで同じ表現に複数の文脈で出会うことになり、次第に正しい理解ができるようになることが期待されています。ただ、学習者が誤解しやすい事柄も少なくありませんので、正しく読むための方法を教える精読授業はやはり重要です。一方で、どうしても不足してしまう読書量を補うために、演習授業やその他の活動で多読学習を広めるための指導を継続していきたいと考えています。

多読教材は多読以外の指導にも活用しています。まず、リスニングについても同様の指導が効果的であると期待されることから、平成 19 年度は多読 3 クラスに加え、応用の試みとして新たに多聴クラスを 1 つ開講しています。また、基本語だけで成立している多読図書は大いに学生のライティングの参考になりますし、読んだ本の内容や感想の紹介はスピーキングやライティングの課題にもなります。

多読教材図書は 2 年間でかなり揃えることができましたが、受講生からはもっと増やして欲しいという要望がありますし、本学の規模を考えるとやはりまだ不十分です。経費とスペースの問題がありますが、今後も学生に必要な拡充を図りつつ、多読指導をより効果的に実施できるよう努めてまいります。

教養教育の可能性

—品質保証と品格保証のあいだで—

文学研究科 教授 千葉 恵

クラーク先生の学生とのただ一つの約束“Be Gentleman”に始まった北大の130年の歴史において、本学の教育制度の変遷は次第に制度や規則を増大させ、単位の上限設定に行き着いた感があります。この制度の導入は学生管理の強化の象徴です。小笠原先生は学生の「単位の早取り」を問題化し、「暇な」学生を生み出し「ガウンからタウン」へ在学時に流れることへの危惧から上限設定への舵を切りました(本誌1999, No.27)。これは端的に言って学生へのおせっかい、過干渉です。将来、学生にそれぞれICタグをつけ、図書館の出入りをチェックすることが冗談ではすまされなくなるほどの介入です。

学問の喜びと意欲を沸かせたいという願いに、そしてさらに「成績よりも大切なものがある」ということに同意しないひとはいないでしょう。制度や規則は学生全体の成績GPを底上げするためにあるという単純なものであれば、私の以下の議論は的をはずしたものとなります。しかし、この教育制度がその「より大切なもの」に資するということも同時に主張するのであれば、やはり議論を続けなければならないと思います。

魂の耕作と教養教育

「平成19年度以降のGPA・上限設定・成績評価…(資料9)」(北大HP, 2006.10.04, 2007.3.06改訂)において「厳格な成績評価による「単位の実質化」は、中期計画に記された本学の大方針(p.2)とあり、この路線は「全人教育」を唱える「札幌農学校以来の本学の教育理念・伝統」と「矛盾しない」とされています。クラークは教育目標を「魂の耕作(cultus animi)」としていますが(『札幌農学第一年報』序文, 1878)、以下点数よりも大切なものの表現として「魂の耕作」を用います。問題は単位の上限設定を通じたGPアップと魂の耕作が内的関係になく、GPの高い学生が必ずしも思慮深い人格を全人的に備える者になるとは限らないことです。上限設定導入がGPアップに繋が

るかはさておき、ここでの喫緊の問いは新制度が人格の陶冶にどのような影響を与えるのか、また教養教育はいかなる仕方で魂を耕作しつつ成績を向上させうるかにあります。

教養教育は、ひと自らが属する社会そして自然等の、学問という理性的な探求を媒介にして、自己が自己自身との一致において生きることのできるロゴスの場所・自己理解を探求し深めることにあります。教養教育が果たしうる使命は、常に生の現場と離れない仕方で幅広い諸学問の知見を関連づけることにあります。そのさい、一番の妨げは自らの生のゴールが既に解釈されてしまっており自明なこととされていることです。教育制度が一義的に点数アップ、資格試験合格という単純な目標を立てるのであれば、もはや魂の耕作はもとより他の何も問われることはありません。そこでは定められたゴールを実現する最善の手段の選択にのみ思考が費やされます。自覚せずにおいた自らの生のゴールを広い視野のもとに反省し、人間、社会、自然、何か超越的なものの理解のなかで自己理解を位置づけること、つまりひとがそこに生きる世界の豊かさの揺るがない認識のなかに自己の生の場を位置づけ築くことこそ教養教育の目標であり、魂の耕作であると信じます。魂の深いところから自らの生全体が、その具体的な判断と行為において、秩序づけられるその思慮深さの涵養にこそこの教育の目標があります。

学業への従事が、自らの生の理解に常にフィードバックされ、全人的な秩序ある魂を耕しているかが問われています。従って、耕し、種を蒔く教養教育の成否は20年30年後に、北大生が専門教育の知見を具体的に社会で発揮し貢献しながら、自らの生を喜ばしいたわわな実りのなかで営んでいるかにか

かっています。生の試練のなかでも雄雄しく現実を引き受け、変革しつつ輝いているかが問われます。端的に言えば北大の卒業生が幸福であるかということによって、教養教育の成否は問われます。

学生の自律性の尊重

規則の増大に比例して、学生の自由選択が減ること、管理化は自明であり、教養教育の目指すものが実現されにくくなるというジレンマを抱えていると言うのが正直な感想です。学生の知性能力と自尊心を総じて創造的で人格高潔な社会人となる可能性を信じ、愛情を注ぐことによってのみ、よい実りが期待されます。誰からも期待をかけられないひとを想像してみましょう。容易に意気阻喪に陥るでしょう。受験勉強から解放された学生に、勉学を強いるのではなく、真理の大海原の探究に漕ぎ出すのを助けるそのような制度であってほしい。自らの可能性に気づかせ、自律的に喜びのもとに勉学に励むそのような学生を一人でも多く育てたい。新しいものとの出会いの可能性を狭める制度は望ましくないと考えます。

経験上、一割の北大生は大概の制度のなかでも自律的に輝き、学に励みその成果を用いて日本、国際社会に貢献する志を持っています。他方、大衆化時代、残念ながら一部の学生はいかなる制度下においてもただ北大の学士号取得のために制度をそして学生生活を利用するだけでもありましょう。その中間に属する学生諸君に学問の豊かさ、真理探究の喜びをそしてそれがどれほど生を豊かにするものであるかを伝え、励ましを与えるその現場の営みを助ける制度でありたいものです。

私立大学では入学者を増やし続け、教室の不足から単位の上限設定を課しているのが実情と聞いています。本学ではこれほど全学的に多くの学問領域の授業を開講しながら、それへの出席を制限しつつ、そのまさに授業中のただなかに図書館に向かわせようとする制度とは一体何でしょう。個人的な調査において自由に選択受講できた授業が三つしかない学生が三割おり驚きました。実際「単位の実質化」に関する」(コアカリグループ 2007.2) アンケート (問

15) において 150 人の学生が回答し 77 人が上限設定に不満を表明し、2 月調査 (問 16) でも 157 人中 54 人が不満を表明しています (2007.3)。「絶対になくした方がよい」。「[応分の授業料] 返還してほしい」や「受けられない授業があったことは腹立たしい ... やる気をなくす」、「授業は自分の責任のもとでとるものだと思うし、学生には好きなものを好きなだけ自由に学ぶ権利がある」、「不快感を覚える。上限設定を考えた方は頭がおかしいと思う」等の声を真剣に受け止めてほしいと思います。学生諸君は高校時代と同様の管理下のもとにあると考え、この現実を奇異とさえ受け止めていないとすれば、教員は本来学問が人間の自由な魂の理性的な鍛錬であることを伝えてあげねばなりません。

単位の上限設定の再考を

教員は真剣に学生に学問の喜びを伝えたいと考えています。教育の力を信じないで教壇に立つひとはいません。私自身この制度により教育する機会を奪われたと感じています。端的に言って、単位の早取りを恐れつつよい教育などできるはずはありません。教員、学生双方の志、意気を阻喪させる制度は改めねばなりません。「生命 [魂の深いところでの喜び] は制度を生むが、制度は生命を生まない」(内村鑑三) のです。制度の使命は血の通う生命と喜びが生まれやすい環境をつくることです。教師が生命の躍動のなかにいずに、どうして学生に学問の喜びを伝えられましょうか。耕し、種を蒔き、水注ぐその営みのなかで思わぬ芽吹きを見いだすのは喜びです。学生諸君は、和紙が水を吸収するように、自らの魂という耕地によきものを吸収し、将来大きな収穫をもたらすでありましょう。その機会を奪ってはなりません。単位上限設定について再考をお願いします。

参考：「平成 19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価制度、カリキュラム、FD 等の改善策について」(最終報告) (2007 年 3 月 6 日)

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/gpajyogen3.htm>

日本の高等教育機関初！「クリッカー」による授業開始 —双方向性授業による学生中心の授業へ—

理学研究院 准教授 鈴木 久男

2007 年度4月10日、北海道大学物理学の授業で、双方向性授業のためのリモコンシステム、通称「クリッカー」が導入されました（写真1）。

クリッカーシステムは、受信装置と発信装置（クリッカー）で構成されます（写真2）。学生の手元に配布されるクリッカーには12個のボタンがあり、学生達は講義でクイズが出された後、正解と思われるボタンを押します。受信装置はUSB接続でパソコンとつながり、各学生からの信号（電波）を受け、誰がボタンを押しているか、選択項目のそれぞれについて何人がボタンを押したか瞬時に計算し表示します。

講義で使用するラップトップパソコン（WindowsあるいはMac）にソフトをインストールし、機能をパワーポイントに組み込むことで、パワーポイントを使った講義に有機的に導入することができます。講義の途中で質問をして、クリッカーで答えさせることで学生の理解度を推測することができます。理解度が低

い場合には、改めて説明したり、学生間で議論させることで理解を深めることができます。

また、講義の難易度や、進み方の速さなどについての学生の意見も随時たずねて、講義にフィードバックさせることもできます。学生の側から見ると、ボタンを押すことで全員が講義に積極的に参加している気分になります。

アメリカでは現在その教育効果が認められ、ほとんどの大学でクリッカーが導入されてきています。現在年間10万人規模の学生がクリッカーを使用しています。最近では、大規模授業だけでなく、少人数教育にも効果があることが報告されています。日本でも、この「クリッカー」の急速な普及が見込まれます。本学はその先鞭をつけることになりました。

興味のある方は、高等教育開発研究部の細川までご連絡ください。

写真1. クイズに対する学生の意見分布と解答を説明する教員

写真2. クリッカー本体と受信装置

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告 (第 67・68 回)

第 67 回 (平成 18 年度第 5 回)

平成 19 年 2 月 27 日 (火) に第 67 回 (平成 18 年度第 5 回) 全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。佐伯委員長が急遽の公務により、小野寺センター長補佐が代理で議事を務めました。また、急逝された工学部野口孝博教授の後任として、千歩修教授が就任されました。

議題 1. 北海道大学高等教育機能開発総合センター
全学教育委員会規程の一部改正

議題 2. 北海道大学全学教育科目責任者等に関する
要項の一部改正

議題 3. 平成 20 年度以降の総合科目・一般教育演習
の充実

議題 4. 平成 19 年度以降の GPA・上限設定・成績
評価、カリキュラム、FD 等の改善策
について (最終報告)

議題 5. 平成 19 年度全学教育科目の開講計画の変
更

議題 6. 翌期再履修に関する取扱い

議題 7. 平成 19 年度全学教育に係る TA 採用

議題 8. 北海道大学附属図書館北分館委員会委員の
推薦

議題 9. 全学教育科目における「授業アンケート」
の活用方法

報告事項 1. 平成 19 年度新入生オリエンテーショ
ン及びクラス担任会議

報告事項 2. クラス担任アンケートの集計結果

報告事項 3. GPA を利用した 1 年次学生に対する
修学指導の実施状況

報告事項 4. 平成 18 年第 2 学期一般教育演習 (集
中講義・フィールド型) の履修調整

報告事項 5. 平成 18 年度全学教育委員会の検討事
項 (報告)

報告事項 6. 平成 18 年度第 1 学期の履修調整

報告事項 7. 平成 18 年度全学教育科目に係る既修
得単位認定

議題 1, 2 は、外国語教育センター、メディア・コ

ミュニケーション研究院の設置等に伴って、「北海道
大学高等教育機能開発総合センター全学教育委員会
規程」を改正するものです。

20 年度以降の総合科目・一般教育演習の 充実

「総合科目」と「一般教育演習」はコアカリキュラ
ムの代表的な科目です。「全学教育科目実施の手引き」
にある”総合科目、一般教育演習の開講にあたって”
で述べられている意義を再確認し、さらに導入科目
として位置付けを強化することとなりました。1 年次
の履修の推奨、実行教育課程表・便覧の科目表の先
頭に配列することになります。また、「一般教育演習」
を「フレッシュマンセミナー」、または、「一般教育
演習 (フレッシュマンセミナー)」と改めることを検
討することとなりました。

19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価、 カリキュラム、FD 等の改善策

これまで本委員会、教育改革室で議論されてきた
「平成 19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価、カ
リキュラム、FD 等の改善策について」が最終報告と
して取りまとめられました。単位の実質化、上限設
定、パス・ノンパス制度のあり方、GPA を利用した
修学指導、今後の FD 研修のあり方など多岐にわた
る説明がなされ、了承されました。本学 HP (<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/gpajyogen3.htm>) にありますので、ご一読ください。

19 年度全学教育科目の開講計画の変更

平成 19 年度の開講計画で、昨年 12 月 5 日の会議
で未定だった担当教員の決定 (113 件)、教員の変更
(96 件)、新規開講 (5 件)、開講取消 (9 件)、学期・
曜日の変更 (21 件) などが認められました。非常勤
講師は、平成 19 年度では「韓国語」、「スペイン語」
分 25 コマ増があるものの、全体としては平成 18 年
度から 77 コマの削減です。また、今後の非常勤講師

の採用計画について説明がなされ、非常勤講師は平成16年度の50%を目処に削減していくことになりました。

翌期再履修の取扱い

①指定学期に履修せず翌期再履修クラスで履修することは認めないこと、②正規クラスと再履修クラスが開講される場合、原則として正規クラスで再履修すること、③休学、留年者に対する取扱いが了承されました。

19年度全学教育に係るTAの採用

全学教育に係るTAの採用は、平成18年度から47名減、1,634時間増、金額としては187万円増になります。これは情報学の非常勤講師削減に伴うTA増によるものです。平成19年度は3,460万円になります。有効活用により教育効果が上がることが望まれます。

全学教育科目における「授業アンケート」の活用

評価室が実施している「授業アンケート」を科目責任者等にも配布して開講計画の立案、組織的な授業改善に活用することが承認されました。

新入生オリエンテーション及びクラス担任会議

平成19年度の新入生オリエンテーション実施予定、案が議論されました。クラス担任マニュアルの大幅な見直しを行い、「クラス担任の心得」を以下のように明確にしました；①教員は、すべての学生を大人として遇し、敬意をもって接すること、②教員は、つねに授業改善に努めるとともに、学生の自主的な学習を支援することで教育責任を果たすこと、③教員は、公正な成績評価を行い、評価基準を公表することで説明責任を果たすこと、④教員は、学生の個人情報に関する守秘義務を遵守すること。

クラス担任によるクラスアワー、オフィスアワーは充実してきています。必修科目を3～4回続けた欠席者、復学・留年した学生への面談など、今後、より一層のきめ細かい指導が望まれます。語学、基礎科目教員との連携も必要になります。

GPAを利用した1年次学生に対する修学指導

各学部のGPAを利用した1年次学生への修学指導の実施状況が報告されました。GPAが2以下の学生には、時間をとっていただき一度面談をお願いしたいというのが原則です。各学部独自の基準での指導でも良いのですが、より一層の充実が望まれます。

一般教育演習（集中講義・フィールド型）の履修調整

第2学期一般教育演習（集中講義・フィールド型）の履修調整は定員が全て満たされ、順調におこなわれました。

18年度のCALL授業の実施報告

平成18年度のCALL授業の実施状況が報告され、TOEFL-ITPの平均点が平成16年度に比べ8.5点の向上が見られています。

高校生による全学教育科目の試行的聴講（中間報告）

平成18年度高大連携事業の中間報告がなされました。平成19年度第1学期での聴講は難しいこと、2学期の聴講については、平成16年度からの実績報告を検討した上で決定することとなりました。

第68回（平成19年度第1回）

平成19年4月27日（金）に第68回（平成19年度第1回）全学教育委員会が開催され、次のような議題について話し合いました。

議題1. 全学教育委員会小委員会の構成

議題2. 学生問題担当委員の選出

議題3. 平成19年度全学教育委員会の検討事項

報告事項1. 平成18年度第2学期のGPA

報告事項2. クラス担任のオフィスアワー

報告事項3. 履修相談MANAVIの実施報告

報告事項4. 平成18年度教育課程の検証結果

小委員会等の構成

議題1, 2では、各委員が次のように決まりました。

○ 小委員会委員

理学研究院 小野寺 彰

委員長・センター長補佐

教育学研究院 小内 透 センター長補佐 (新任)

メディア・コミュニケーション研究院

大野公裕 センター長補佐

高等教育開発研究部 安藤 厚 センター長補佐

文学部 白木沢 旭児 (新任)

法学部 村上 裕章 (新任)

理学部 神保 秀一 (新任)

工学部 千歩 修

農学部 川端 潤 (新任)

獣医学部 木村 和弘 (新任)

外国語教育センター 山田 義裕 (新任)

○ 学生問題担当委員

法学部 村上 裕章

工学部 千歩 修

平成 19 年度全学教育委員会の検討事項

議題 3 では、平成 19 年度全学教育委員会の検討事項 (案) について、佐伯委員長、小野寺センター長補佐から説明があり、各項目について小委員会で今後検討することになりました。

1. 中期目標・中期計画 (平成 19 年度年度計画) の実施状況

20 年度実施の暫定評価を控え、年度計画の着実な達成を図る。

2. 「秀」評価及び GPA 制度の実施 (報告と Q & A)・履修登録単位数の上限設定・成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施・単位の実質化

単位の実質化を念頭において、GPA 制度、履修登録の上限設定及び履修取消し制度、成績評価基準の明示・設定、成績評価結果の公表・妥当性を検討する。また、単位の実質化を進める授業法の開発・FDなどを検討する。

3. 平成 18 年度以降の教育課程について

(1) 新カリキュラムに対応したコアカリキュラムの充実 (一般教育演習・総合科目の充実)

(2) 今後の外国語教育の在り方について (最終報告)(H18 年 5 月) に基づいた外国語科目及び外国語演習の充実、初習外国語科目の見直し、

国際交流科目と外国語演習の関係の整理

(3) 情報科目、文系基礎科目、理系基礎科目、自然科学実験等、新科目の検証

(4) 互換性科目の在り方

(5) TA の活用・TA 研修の充実

4. 全学教育科目の充実

(1) 履修調整 (抽選のシステムを含む) 結果の検証 (一般教育演習、外国語演習の少人数クラスの問題)

(2) 19 年度以降のカリキュラムに対応した開講時間帯の検証 (適切なクラス規模・開講科目数)

(3) 学部との連携: 互換性科目の検証、外国語演習への外国語教育センター以外の部局の教員参加 (全学 協働体制) の拡充、「翌期再履修」クラスの検証等

(4) 「サステナビリティ教育」の充実

5. 全学教育支援体制の構築

(1) 科目責任者会議の機能強化

(2) 責任部局の「責任コマ数」、基礎科目等にする「全学支援」、一般教育演習・総合科目における「全学協力」について

6. 平成 18 年度以降の教育課程の実施に伴う教務事務体制

7. シラバスの在り方

内容の充実、シラバスのペーパーレス化の検討

8. 新教務情報システムに係る要望事項

(1) 新システムでの入力作業等の改善事項の検証

(2) 教務情報システムとシラバスデータの共通化の検証

(3) e-Learning を利用したクラスのコミュニケーションシステムをシラバス・履修登録・成績分布公開システム及び図書館蔵書データベースと結びつけた統合的な学生支援システムの構築

9. 全学教育における施設・設備の充実

(1) S 講義棟, N1, N2 講義室, 大講堂への渡り廊下室, S 教官棟の整備・充実

(2) 自然科学実験の実験室・設備等の整備

(3) 視聴覚機材 (OHP, 資料提示装置等) の整備

(4) 新基礎科目, パイロット授業のための施設・設備の充実

(5) CALL システムの充実

10. 履修指導

- (1) 組織的な履修指導
- (2) クラス担任による指導
- (3) 履修相談, オフィスアワー, クラスアワーの充実
- (4) 個別指導の強化
- (5) GPA を用いた修学指導の検証
- (6) 学生生活全般の指導との関連づけ (学生委員会との連携)
- (7) 修学指導の充実に関連して, 父母等との連携の強化。父母への学修簿送付等の方策の検討

11. 流用定員解消に伴う全学教育

教育改革室・全学教育実施体制運用の在り方検討WGの検討結果への対応, 特任教員 (外国人教師) の在り方の検討

12. 全学教育における非常勤講師

- (1) OB 教員に関する申合せの見直し
- (2) H20 年度以降における非常勤講師採用数の削減計画

13. 高大連携授業の今後の在り方

14. 「学生による授業評価アンケート」「コアカリキュラムアンケート」「学生生活実態調査」等の結果を組織的に授業改善に活用する方策

15. 定期試験を含めた授業期間 (16 週) の運用法

16. 既修得単位認定における科目等の見直し

17. H19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価, カリキュラム, FD 等の改善策について (最終報告) に盛り込まれた課題への対応

- (1) H20 年度以降の総合科目・一般教育演習の充実 (「導入科目」としての位置づけの明確化)
- (2) 学生の申請によるパス・ノンパス制度の検討

H18 年度第 2 学期の GPA

全学平均 GPA は第 1 学期より 0.09 減となったが前年 2 学期に比べ 0.07 上昇した。上限設定により履修科目に特定して学習している効果と考えられます。各学部の平均値, GPA 分布グラフを利用した修学指導がのぞまれます。

学習・履修指導の充実

クラス担任会議を開催し, 学生の学習上や生活の相談のため, クラスアワー, オフィスアワーをお願いしております。メンタルヘルス面で問題が見られた場合は学生相談室, 保健管理センターと早めの連携が望まれます。また, 履修相談会 MANAVI が在学生の協力の下に行われました。また, 学修簿の父母の送付など修学指導の充実を H20 年度実施に向け検討を進めるよう佐伯委員長より発言がありました。

(小野寺彰 理学研究院教授・センター長補佐)

コアカリキュラム, 平成 18 年度教育関連 報告書と資料集を刊行

以下の出版物が刊行されました。それぞれ HP にも公開されています。今後の北大の教育改革の基本資料です。ご覧ください。

- ① 平成 15 ～ 18 年度特色ある大学教育支援プログラム「進化するコアカリキュラム—北海道大学の教養教育とそのシステム—」報告書 (2007.3)

HP: <http://educate.academic.hokudai.ac.jp/neouniv2/index.htm>

報告書: <http://educate.academic.hokudai.ac.jp/neouniv2/html/houkoku.htm>

- ② 平成 18 年度からの新教育課程・「単位の実質化」に関する学生・教員アンケート調査 (第 1 回報告書) (2007.2)

- ③ 平成 18 年度からの新教育課程・「単位の実質化」に関する第 2 回学生・教員アンケート調査 (2007 年 2 月実施) 報告書 (2007.3)

- ④ 北海道大学 全学教育 TA アンケート調査報告書 (2007.3) <http://socy.hokudai.ac.jp/TACQ/TACQ.html>

平成 18 年度教育改革 資料集 (教育改革室, 2007.3)

1. 平成 19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価制度、カリキュラム、FD 等の改善策について
<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/gpajyogen3.htm>
2. 「秀」評価、GPA 制度及び履修登録単位数の上限設定の実施について (Q & A : 平成 19 年度入学者用)
<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/qanda190306.pdf>
- 3 北海道大学における今後の外国語教育の在り方について

- <http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/gaikokugo2/gaihou17lineoff.pdf>
4. 北海道大学における今後の FD の在り方について
<http://socyو.high.hokudai.ac.jp/FDWG.html>

センター CENTER

TA 研修会を開催ー 202 名に修了認定ー

2007 年度の TA 研修会が、4 月 4 日 (水) にセンターの大講堂を主会場として開催されました。全学教育を担当する TA に対しては、当該授業科目の担当教員によるオリエンテーションのほかに、事前に当該業務に関する適切なオリエンテーションが義務づけられています。本センターでは、平成 10 年度から TA 研修会を実施してきており、今回で 10 回目の節目を迎えました。今年度の全学教育における TA 採用人数は、のべ 672 名 (対前年度比 7% 減) です。

のべ時間は 6% 増加しており、TA 一人あたりの勤務時間の増大が推測されます。TA 制度は広い意味の大学院教育の一環として導入された制度で、大学教員となるための実地訓練 (教育現場の体験) のための制度ともみなされています。また、大学院学生は教員とともに学部教育に参加することによって、自分の専門についてより一層理解を深めるとともに、教育の現場において教えるとはどういうことかを理解することになります。

研修の目的は以下のように要約されます。

- 1) 大学教育の基礎を理解する
- 2) 全学教育の趣旨を理解する：目的、意義、全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心構え、教育理論について理解する
- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
- 5) TA 相互の交流をはかる

午後の分科会の種類は昨年同様 12 分科会としましたが、人数の少ないグループがあったため当日 10 分科会に統合しました。参加者は 202 名でした。受講者は例年以上に真剣に研修に取り組んでいました。

なお、昨年および今回配布されたテキスト「北海道大学ティーチング・アシスタント マニュアル」は、今年度中に改訂される予定です。TA 研修を本格的に導入しようとする大学も出てきており、今回の研修

には一橋大学大学教育研究開発センターの教員が参観しました。

分科会の報告

一般教育演習および一般教育演習／フィールド

一般教育演習はフィールド型と合同で実施し、参加者は 27 名でした。過去に授業中に起きた事例を元に、グループ学習を用いて進めました。一般教育演習では、この学習形態が多いからです。

まず、「グループ学習の実際」というテーマで、その意味や形態、注意事項について簡単なレクチャーを行ない、アイスブレイキングの体験を行いました。次に過去に授業中に起きた事例等を元にした、基礎編と応用編の 2 つのセッションを設け、それぞれ課題を自由選択し、30 分でグループごとに問題解決を図る形で取り組みました 9.5 ングです。その後、各

表 1. 平成 19 年度北海道大学全学教育 TA 研修会プログラム

<午前部>

- 9:30 挨拶 中村 睦男 総長
- 9:35 講演 「北海道大学の新教育課程と単位の実質化」 安藤 厚
- 10:05 講演 「Teaching Assistant」 瀬名波栄順 (文学研究科)
- 10:35 休憩
- 10:45 ミニ講義 「大学教育の基礎について」 西森 敏之
- 11:00 パネル討論「TA の可能性～現状と理想」
司会：細川 敏幸
パネラー：栗原 秀幸 (水産科学研究院),
布施泉 (情報基盤センター),
小幡 宣和 (院生), 柳田拓人 (院生)
- 12:00 ~ 12:45 昼休み
- 12:45 ~ 13:15 【N245】 コーヒーブレイク (自由参加)
TA 経験者との談話

<午後部>

- A. 一般教育演習【N304, N231, N232, N242】 鈴木 誠, 池田 文人 (高等教育機能開発総合センター)
- B. 一般教育演習 (フィールド)【N304, N232】
栗原 秀幸 (水産科学研究院)

- C. 講義【大講堂, N283, N271, N272, N273】 細川 敏幸, 西森 敏之 (高等教育機能開発総合センター)
- D. 論文指導【N233, N244, N243】 池田証壽 (文学研究科)
- E. 情報学【情報教育館 2 階実習室 (A, B, C)】 布施 泉, 岡部 成玄 (情報基盤センター), 村井 哲哉 (情報科学研究科)
- F. 英語 II オンライン授業【E309CALL 教室, 情報教育館 CALL 教室, 教務課, S-333 室, 国際広報メディア・観光学院 210CALL 教室】 土永 孝 (メディア・コミュニケーション研究院)
- G. 英語 II 以外の英語の授業【国際広報メディア・観光学院 110CALL 教室】 奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)
- H. 中国語【国際広報メディア・観光学院 105 教室】
諏訪一幸 (メディア・コミュニケーション研究院)
- I. 文系基礎科目【N234】 尾崎一郎 (法学研究科)
- J. 心理学実験【心理学実験室】 和田 博美, 眞嶋 良全 (文学研究科)
- K. 理系基礎科目【N208】 小野寺 彰, 柄内 新 (理学研究院)
- L. 自然科学実験【N302, 物理, 化学, 生物, 地学の各実験室】 熊谷 健一 (理学研究院)

セッション3分発表2分質疑を行い、それぞれ担当教員からコメントや注意事項を付す形で進めました。

今年は参加者が少ないこともありましたが、3グループともまとまりがよく、意欲的に作業を進めていました。発表内容には、処方箋を急ぎすぎるものや、学生のモニタリングに欠ける内容など改善すべきものが多いようでした。また、教員との距離の取り方を心配する声も上がりました。しかし取り組む姿勢は良好で、例年になく充実した2時間半でした。

講義および理系基礎科目

まず大講堂において、教務係八戸さんが講義のTAが知っておくべき事務処理上の諸注意やAV機器の操作方法について、30分間説明しました。次に会場をN283に移動し、細川が講義に関して留意すべきことをマニュアルを元に解説しました。さらに5つのグループごとに別れて座り、グループ学習の基礎を説明した後アイスブレイキングとして、「古新聞の使い方」を4分で考えて発表してもらいました。グループ学習では、「講義中に講義に関係のない本を読んでいる学生がいる。」など4つのケーススタディについての解決策を話し合い、発表しました。昨年よりも細かな場合分けをして課題に取り組んだグループが多く、そのまま使える解決策がたくさん提示さ

れ、有意義な発表となりました。

論文指導

前半は論文指導の概要とTA業務との関連を解説し、後半は3グループに分かれてレポートの添削・評価を実習して、意見交換を行いました。レポートの添削の実習は好評のようでしたので、次回以降、十分に時間を取って行うことが望まれます。参加者は19名。内訳は主題別科目（論文指導）9名、一般教育演習（論文指導）8名、総合科目1名、不明1名でした。担当科目について十分な理解がないTAも数人いました。適切な分科会に配属されなかったことに不満を感じる者も若干いる様子でした。

情報学

情報教育館2階の実習室にて、まず、企画責任者の栗原教授より情報学Iの目標と内容、実施体制、用いる教材等、成績評価の概略を説明いただきました。続いて科目責任者の岡部教授より、情報学Iの実習内容と評価項目等の具体的な説明がありました。休憩後、情報学のTAを行うにあたって必須である、情報基盤センターの教育情報システムを使った授業課題の設定方法について研修を行いました。研修会後に質問時間を設けましたが、熱心なTAが多く、最終的な

終了が午後6時30分になるなど、大変有意義な研修会となりました。なお、本TA研修会の分科会は、大学院共通科目である「情報学教育特論」の講義も兼ねております。

英語Ⅱオンライン授業

最初に、英語Ⅱオンライン授業が行われる3つのタイプの教室のCALLシステムの特徴の説明と、教材を提供するソフトウェアであるWebTubeの操作方法についての簡単な実習を行いました。特にE309に昨年度導入されたマッキントッシュを使ったCALLシステムの特徴を詳しく説明しました。その後で情報教育館CALL教室、国際広報メディア・観光学院210CALL教室に移動して、それぞれの教室のCALLシステムの特徴を説明しました。

英語Ⅱ以外の英語の授業

初めに午後1時より30分間研修を行いました。英語授業のタイプの多様性を確認した後、それぞれの授業での大まかな役割を確認しました。ワークショップとして「担当の先生へ提言・サジェスションがある場合どうすればよいか」をテーマに、グループディスカッションと発表をしてもらいました。また、トラブルの際の連絡先などを確認しました。

その後、教員および中国語のTAと合同のCALL授業講習会に参加しました。CALL教室及びWebtubeの利用法の講習と三つのデモ授業に参加し、質疑応答を行いました（以上、国際広報メディア・観光学院110CALL教室で）。その後、システムの異なるE307CALL教室へ移動し、教室の仕様、機能の概要の説明を受け、質疑応答を行いました。

中国語

中国語分科会は13:00から13:25まで研修会を行いました。まず、諏訪より、「中国語及び中国に対する纏まった知識もないであろう学生から見ると、皆さんが中国そのものなので、そのような認識で、真摯な態度をもって、協力して欲しい」、「授業は90分だが、“拘束”は120分可能。具体的な問題について

は、各自、個別の教員に確認して欲しい」といった趣旨を話しました。

学生より何点か質問があり、その場で答えるとともに、必要に応じ、研修終了後、各教員に回答を依頼しました。

文系基礎科目

当分科会は、5名の大学院生の参加により行われました。まず、昨年度から新設された文系基礎科目の趣旨を説明し、大学における学習への導入を意図した同科目のTAに求められるであろう役割について検討しました。さらに、文系学生にとっての必修科目であることに鑑み、学生の常習的遅刻や不正行為への対処方法、授業内容に対する学生からのクレームへの対処方法を、重点的に協議しました。

心理学実験

まずTAの心構え、実験科目におけるTAの役割、実験で使用する機器に関するレクチャを行いました。その後、個人情報を含むデータの取り扱いや、心理検査の結果のフィードバックの仕方など心理学実験に特有の問題、および実験実習一般に関する話題などを取り上げ、全体討論を行いました。特に、心理学実験実習に特有の話題については、参加した大学院生および教員を交えた積極的な討論が行われました。本分科会を通じて、参加者には、他の実験科目にはない心理学実験実習に特有の事情に対する理解を深め、TAとして従事することへの自覚や責任感を高めてもらえたと思います。

自然科学実験

まず実験の実施方針や実施内容に加えて成績評価基準などについて説明し、学生には教員と同じレベルでの対応ができるよう理解をしてもらいました。また、TAの一般的な役割とともに、TAの特性を生かしたきめ細かい実験指導も重要であるとの説明をおこないました。研修後半では各教科カテゴリー毎に分かれ、具体的なテーマの実施内容について研修を行いました。

生涯学習 LIFELONG LEARNING

北海道大学公開講座の日程決まる 「くらしを創る－安全と安心の科学－」

2007年度の北海道大学の公開講座は、7月2日(月)から7月30日(月)まで8回にわたって開催されます。今年のテーマは「くらしを創る－安全と安心の科学－」で、一昨年の「くらしが危ない」、昨年の「くらしを守る」に続く、安全と安心の科学の

シリーズ3回目となります。交通、教育、環境、エネルギー、医療、過疎化や地方財政危機のもとでの地域づくり・まちづくりの課題など、本学ですめられている先端的で多面的な研究成果に基づき、私たちのくらしをいかに創造すべきかを学習します。

表2. 平成19年度北海道大学公開講座の日程

回	月日	演 題 および 講 師
第1回	7月 2日(月)	北海道民の新しい暮らしをつくる新幹線 公共政策学連携研究部 教授 佐藤馨一
第2回	7月 5日(木)	フツの高校生の素顔－自分らしさへの期待と諦めを生きる－ 教育学研究院 准教授 浅川和幸
第3回	7月 9日(月)	今日の子どもたちの攻撃性と教育について －貧困・格差・排除・いじめ・虐待の視点から－ 教育学研究院 准教授 間宮正幸
第4回	7月12日(木)	自然を復元できるか 農学研究院 教授 中村太士
第5回	7月19日(木)	バイオマスエネルギーの課題 農学研究院 教授 松田従三
第6回	7月23日(月)	地方分権改革と行財政－夕張問題と道州制を繋ぐ－ 公共政策学連携研究部 教授 宮脇 淳
第7回	7月26日(木)	地域の自立とは何か －“小さくても輝く村” 西興部村に学ぶ－ 北方生物圏フィールド科学センター 教授 神沼公三郎
第8回	7月30日(月)	安全・安心の地域医療は可能か 医学研究科 教授 前沢政次

※ 各回とも午後6時30分～午後8時30分（講義時間90分、質疑30分）

○ 会 場 ：北海道大学情報教育館3階（札幌市北区北17条西8丁目）

○ 募集定員：100名

○ 受講料 ：5000円（1回だけの受講の場合1500円）

○ 募集期間：6月11日(月)～6月26日(火)

○ 問い合わせ・申し込み先：北海道大学学務部教務課（生涯学習担当）電話 011-706-5252・5253

生涯学習の新たな試み 「どこでも天文台」

望遠鏡がない場所でも天体観測を体験できる試みとして、「どこでも天文台」を4月23日(月)の夜に情報教育館共用多目的教室(2)を開催しました。これは、地域の期待に応じて開設されたにもかかわらず住民に身近なものとならない公開天文台を生涯学習の活用するための実践的研究の一環として、天文台制御のソフト制作者の中西靖男さん(本学教育学研究科で生涯学習計画を学ぶ社会人大学院生)がもつ上富良野町の「一番星天文台」と北海道大学とをインターネットで結ぶ観測会を公開実験として実施したものです。

開催について新聞でも報道され、市民からの電話

による問い合わせもたくさんあり、参加者は子ども連れも含め100名ほどになりました。会場では大学院生の司会により上富良野町の中西さんとネット上の画面を通して質疑やクイズが行われ、大きく映し出された月面や土星を見ながら、月面の「クレーターの大きさは」など質問もたくさん出されました。会場に溢れるほど集まった参加者から次の企画を望む声もあり、私たちの予想以上に好評でした。

私たちは、このような機会をきっかけとして、多くの人々が実際に天文台に足を運び、天文台を利用した人たちが満足するようなプログラムの企画開発をしたいと考えています。

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

北大生による北大生のためのキャンパスツアー

4月22日(日)の午前10時から、アドミッションセンターと共同で、「北大生による北大生のためのキャンパスツアー」を実施しました。ガイドを務めたのは、北大キャンパスビジットプロジェクト(以下、北大CVP)に所属するボランティアの学生たちです。参加者は3名で、水産学部の新入生、農学部の2年生、理学院の修士1年生でした。

ポカポカ陽気の中、北大CVPの拠点である北大交流プラザ「エルムの森」を出発し、クラーク像、中央ローン、そしてサクシュコトニ川のほとりを北上してポプラ並木まで行き、総合博

物館を見学して戻ってきました。ツアー終了後は北大名物の「ジンパ」を行い、キャンパスの見所や授業、研究、アルバイト、就職活動など、様々な学生生活の話題で話に花が咲きました。ツアーとジンパに参加した3名は、自分たちのキャンパスの魅力を再認識したようで、自分もガイドができるようになりたいと意気込んでいました。

今後も、北大CVPの活動を知ってもらうために、北大生に本学のキャンパスの魅力を伝えるツアーを企画していく予定です。

写真1. 説明する北大生ガイド

センター日誌 CENTER EVENTS, February- March

2月

- 5日 ・(会議) 第8回生涯学習計画研究委員会公開講座実施部会
- 7日 ・(会議) 高等教育機能開発総合センター連絡会議
- 9日 ・(会議) 全学教育実施体制運用の在り方検討WG
- 13日 ・(会議) AO入試委員会, 入学者選抜委員会
- 15日 ・(会議) 第17回GPA・上限設定・成績評価実施検討WG
- 19日 ・(会議) 第31回高等教育開発研究委員会
- 20日 ・(会議) 第8回学部教育検討WG
・(会議) 第39回生涯学習計画研究委員会
・(会議) 「総合科目」科目責任者会議
- 21日 ・(会議) 平成18年度第8回教育改革室会議
・(会議) 第137回全学教育委員会小委員会
- 22日 ・(会議) 第30回共通授業検討専門委員会
- 23日 ・(会議) 第20回教育システム弾力化検討専門委員会
- 25日 ・一般選抜前期日程入学者選抜試験
・センターニュース第69号発行
- 27日 ・(会議) 第67回全学教育委員会

3月

- 2日 ・(会議) 平成18年度第5回センター運営委員会
- 6日 ・(会議) 第43回教務委員会
- 7日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- 8日 ・一般選抜前期日程, 私費特別選抜合格発表
・(会議) AO入試部会
- 12日 ・一般選抜後期日程入学者選抜試験
- 14日 ・(会議) 第9回学部教育検討WG
- 19日 ・(会議) 平成18年度第9回教育改革室会議
・(会議) 平成18年度第6回センター運営委員会(持ち回り)
- 22日 ・(会議) 入学者選抜委員会
・(訪問) 札幌月寒高校
・(会議) 平成18年度第2回予算・施設委員会(持ち回り)
・(会議) クラス担任代表会議
・(会議) クラス担任全体会議
- 23日 ・一般選抜後期日程合格発表
- 29日 ・(会議) 大学院共通授業の在り方検討WG

行事予定 SCHEDULE, June - October

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
6月	7(木)	開学記念行事日	休講
	7(木)～10(日)	大学祭	休講
7月	17(火)～18(水), 及び24(火)～25(水)	補講日 補講日	
	30(月)	第1学期授業了	
	31(火)～8月10(金)	定期試験	
8月	13(月)～15(水)	追試験	
	13(月)～9月28(金)	夏季休業日	
	15(水)	成績報告締切(非常勤[帳票])	
	23(木)正午	成績報告締切(常勤[Web入力])	
9月	中旬～下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
10月	1(月)	第2学期授業開始	
	1(月)～2(火)	抽選科目の申込期間	
	9(火)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日	
	10(水)～16(火)	平成18～19年度入学者履修届Web入力	
	10(水)～11(木)	平成17年度以前入学者履修届受付	

センターニュース 2007, No. 70 目次

＜巻頭言＞学部・大学院教育の国際化推進 佐伯 浩	TA 研修会を開催ー 202 名に修了認定ー
英語「100 万語多読」指導 高見 敏子・原田 真見	北海道大学公開講座の日程決まる 「くらしを創るー安全と安心の科学」
教養教育の可能性ー品質保証と品格保証のあい だでー 千葉 恵	生涯学習の新たな試み「どこでも天文台」
日本の高等教育機関初！「クリッカー」による 授業開始ー双方向性授業による学生中心の授 業へー 鈴木 久男	北大生による北大生のためのキャンパス ツアー
全学教育委員会報告（第 67・68 回）	センター日誌・行事予定
	目次・編集後記

編集後記

新学士課程の導入後、二回目の新入生を迎えました。履修単位数や成績評価に関して学生側の選択肢が増え、上級生や担任の助言も受けやすくなっています。日本の学生にも、米国の新しい世代の大学生 ("the Millennial Students", Howe & Strauss, 2000) と共通の学習スタイルや意識が見られます。この世代は、教育に関心の高い過保護な親を持ち、コンピュータゲームや携帯電話とともに育ち、関心は広いが自己中心的、何をいつどのように学ぶのかは自分で決められると思っており、自信はあるが権威に逆らわない…。学生の意識や態度の特徴を把握し、その特徴に適合する授業のやり方や学生サービスの方策を策定することが、今日の大学の重要な課題になっています。(碧)

センターニュース 第 70 号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2007 年 5 月 25 日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・木村 純・町井輝久
安藤 厚・川初清典・亀野 淳・山岸みどり
鈴木 誠・池田文人ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center>